

## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

期 間：2019年4月～7月

学校名：大阪市立新巽中学校

### 本期間の取り組み内容

この期間で実施した主な取り組みは大きく5つある。以下、それぞれの項目で報告する。

#### 1) 研究の方向性の共有とチーム編成

- ・学校長をはじめ、教職員の入れ替わりが行われたこともあり、研究概要と取り組みの方向性を再確認し、今後の本校の目指す環境整備を明らかにした。<表1>はこれまでの取り組みの経緯をまとめたものである。また、<表2>は今後の整備によって創っていきたい本校の学習環境をまとめたものである。
- ・4月3日に行った新年度会議では研究担当より、研究の概要の説明と、学校の課題を改善するグループワークを実施した。ICT活用、授業改善、設備面、情報共有のインフラなど多様な課題が明らかになり、まなボードを用いてまとめ、研究を通じて解消を図る内容を確認した。<教員のグループワークの様子>→
- ・4月中旬に本研究を推進するにあたって3つのチームを編成した。



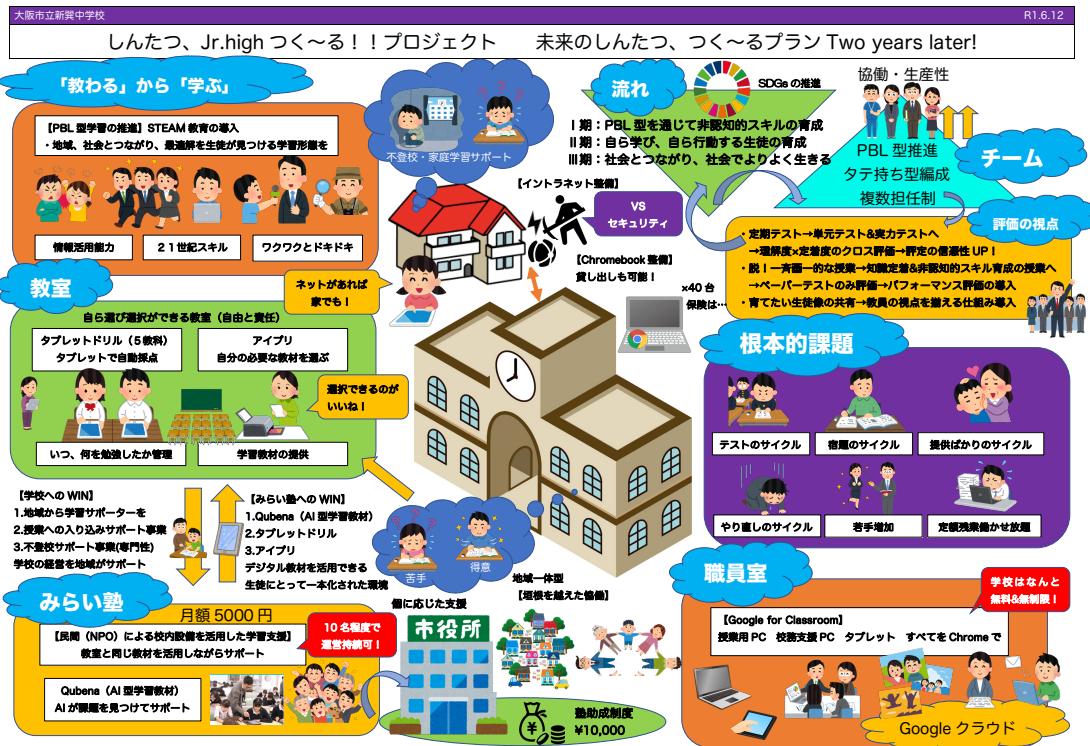
- ①チーム学び方改善：すべての個に応じて（生徒も教師も）誰も取り残さない学習の仕組みをつくる
- ②チームPBL：探究的な学習を企業や社会と「継続的」に実施し、持続可能な探究的学習の仕組みをつくる
- ③チームインフラ：本校のすべての実践が、テクノロジーを土台として、その上に教育環境を再構築する仕組みとなるような環境整備をする

<表1> ~学校改善の取り組み~

学校づくりの流れ		
年代	仕組み	環境
2016	複数担任制 総合的な学習の時間の撤廃（英語5hなど） 小学校への兼務発令（音楽・家庭科・体育）	放課後学習会の実施
2017	探究的な学習の実践（学年で）	まなボード（20枚）導入
2018	タテ持ち型編成の導入 校時を8:35から授業へ 年間を通してPBL型の学習実践 SDGs×教科横断型の学習実践	プロジェクター全教室へ据付・常設 書画カメラ全ての普通教室へ常設 黒板をホワイトボード化 まなボード12枚追加
2019	全学年でのPBL型の学習実践 定期テストの撤廃→単元テストの導入 放課後25分の単テタイム 副教材購入の廃止 外部テストの導入 理科の小中派遣授業（6年）	タブレットドリルの導入 タブレット型学習教材の導入（検討中） プリント型教材の導入（検討中） Chrome Bookの導入（検討中）

## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

<表2> ~形にしたい学習環境~



### 2) 学び方や評価方法改善の手段として定期テストを廃止 → 単元テストへの移行

・ 4月から本校は慣例化された定期テストを廃止し、単元テストへ移行した。個人の意識や手法に偏ることなく、全教員が当事者意識を強く持ちながら協働し、学び方や評価方法を改善する仕組みを整えるためである。教育効果を向上させる目的としては以下の3点が挙げられる。また、定着度や相対的な力を図ることを目的として到達度確認テスト（実力テスト）も学期に1回程度実施することとした。

- ①生徒、教師双方向にとって生徒のつまづきや指導の必要な重点を早期発見し、学び方の改善と、授業改善に努めるため
- ②相対評価の考え方から絶対評価の考え方に基づいた評価を充実させるため
- ③多様性ある生徒に対して、スマールステップで学習を積み重ねる環境を整え、再チャレンジ（学び直し）が可能な仕組みを整えるため



<単元テスト実施の様子>



<到達度確認テスト作成研修>

## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

### 3) タブレット型学習教材の導入と、ICT 活用研修

- ・大阪市教育委員会から7月よりタブレットドリル（東京書籍）が導入された。すでに生徒への講習会は終わり、ネット環境が整っていれば、学校以外でも使用することができる。使用目的を以下の3点に焦点をあて、効果的な活用事例をつくる。
  - ①放課後学習会や家庭学習での自学自習を推進するための手段として
  - ②授業における個別最適化された学びを推進するための手段として
  - ③単元テスト作成機能とし、自動採点化のシステムを構築するための手段として
- ・google フォームなども活用しながらアンケートやテスト作成の効率化を図る。



<タブレットドリルを使った数学の授業の様子>

### 4) 全学年でのPBL型の学習プログラムの実践

- ・社会とのつながりを持って継続的に探究的な学習者を育成するために、全学年でPBL型の学習実践を始めた。  
3年生：「しんたつ、つなぐプロジェクト」  
2年生：「Future Actions」  
1年生：「しんたつ、Jr.high つく～るプロジェクト」  
と題し、非認知スキルや情報活用能力の育成を目的としている。2年生は『キャリア教育×グローバル教育』を主幹にすえ、マレーシアで学ぶ学生とのスカイプ交流やビデオレター、メッセージカードでの交流を行った。



<マレーシアとスカイプ交流の様子>

## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

### 5) 先進校視察等の充実

- ・この期間で自主研修を含め、述べ15名の教員が視察等に行くことができた。
  - ①株式会社 COMPASS の Qubena 活用セミナー \* 5月25日 1名
  - ②大妻中学高等学校視察 \* 5月31日 2名
  - ③福井大学教育学部附属義務教育学校視察（音・保育・技）\* 6月7、21日 3名
  - ④New education EXPO 2019 \* 6月15日 2名
  - ⑤G Suite 活用セミナー \* 6月22、23日 1名
  - ⑥国際協力連続セミナー in JICA 関西 \* 6月24日 3名
  - ⑦千代田区立麹町中学校との交流 \* 6月28日 1名
- ・大阪大学「学校づくり研究会」での発表 2名  
大阪大学の志水幸宏教授が主催する研究会で本校の取り組み実践を報告することができた。

#### アドバイザーの助言と助言への対応

テスト範囲、実施時間、一日のテスト量、精神的な落ち着き感、採点業務の増加など、方法的な改善策を講じる必要があることをご指摘いただいた。目的から手段を再整理し、運用可能な仕組みを整えるために以下の視点で整理いただき、その視点に基づき、2学期からの運用方法を共有し、改善計画をつくることができた。改善策は以下>>で示す。

- ①単元テストを実施する目的を再定義すること  
>>「学び方の改善と授業改善」、「絶対評価の方法の充実」、「再チャレンジの機会の提供」の3点で再定義した。
- ②単元テスト実施における問題点の整理と持続可能な取り組みにするための視点  
>>再定義した目的に沿ってテストルールの緩和案を作成した。
- ③形成的評価と総括的評価のバランスの調和  
>>ペーパーテストで評価できること、ペーパーテストでなくても評価できること、そもそも教科を通じて身につけたい力とは何か？を全教員が当事者意識を持って見つめ直し、教科単位で改善策を講じた。

#### 本期間の裏話（うれしかったこと、苦心談など）

- ・生徒たちも教師も新しいことや大きな変化を強いられることは文字通り、「大変」である。そんな中、与えられた環境の中で、いかによりよく学ぶか、よりよい仕組みを構築するか、この視点で双方ともに課題解決をしてくれた。アンケートを実施したが、「家庭学習の量が増えた」、「成績が上がった」と実感し、懇談時に肯定的な意見が寄せられたことに何よりも安堵した。というのも、「本当に意味があるのか？」、「目的を達成する仕組みとして機能してるので？」と不安になるときも多く、前進しているのかどうか行き先不透明な時期があったからだ。もちろん改善すべき点も多く出たが、生みの苦しみを生徒と教師で共有し、改善することができたことは素敵なことあり、非常に喜ばしいことと感じた。

## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

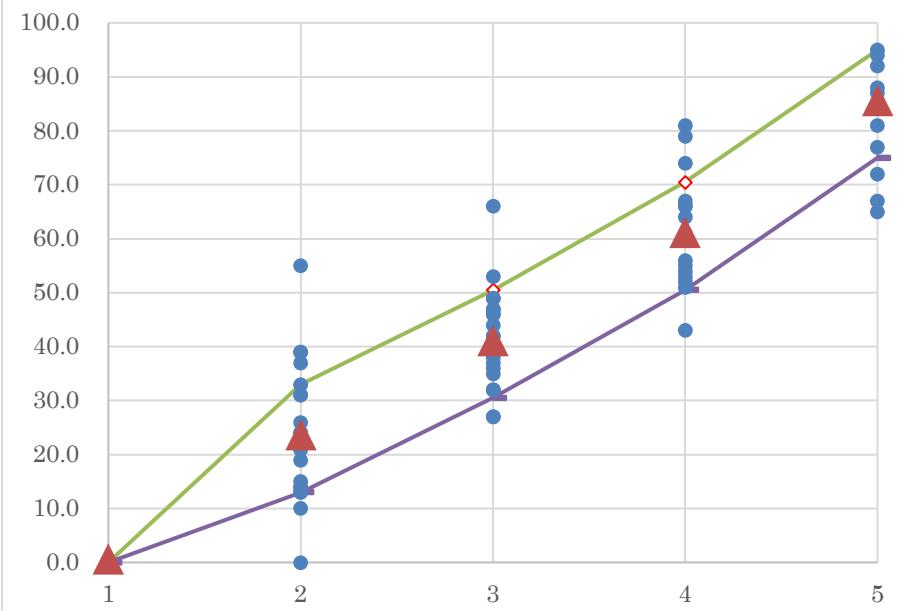
- ・テクノロジーを基盤とした学校づくりの推進には、やはり情報セキュリティの視点というジレンマがあること。大阪市はインターネットでネットワークを構築しているため、教育委員会とも方向性を共有し、「いつでもどこでも」学習の手立てが取れる環境整備を進めることができるかが課題である。

### 本期間の成果

- ・単元テストをただ「定期テストの細切れテスト」のような認識で進めると非常に多くの課題が出ることがわかったこと。
- ・生徒にとってはテストが続き、休みなく不安定な状況をつくり、教師にとっては採点作業やテスト作成が多くのしかかるということがわかったこと。
- ・スマールステップを踏み、必要な教科の力を身につけるための手段としてテストを活用するためには、テストの質（内容や問い合わせの精選、問題の種類など）に着目し、テストで測りたい力を明確に示し、目的に沿った問題作成を行うことが大切であるとわかったこと。
- ・様々な問題点と向き合いながら進めたが、今後に向けた解決案について合意形成を図ることができたこと。
- ・単元テストと到達度確認テスト（実力テスト）の両輪で生徒の学力を理解度と定着度の2つの視点で区分けし、総合的に評価する仕組み＜表3＞をつくることができたこと。
- ・教員の協働力やチームで推進する力が高まったこと。
- ・75分授業（6限+25分のモジュールタイム）の実技教科の前向きな活用事例（家・保育）ができること。
- ・教師が学校の慣例に縛られることなく、自由な発想で本校の今の課題解決に向け、イノベーションを起こすことができるようになったこと。

＜表3＞

到達度テストと評定の関係(3年英語)



## 活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

### **今後の課題**

- ・各教科の単元テストの質の変容
- ・75分授業（6限+25分のモジュールタイム）のより良い活用方法の模索
- ・タブレットドリルやgoogleフォームを活用した自動採点化システムの構築
- ・個別最適化された学びを充実させるための授業改善
- ・持続可能な運用による、自学自習を推進する環境づくり
- ・デジタル教材を用いたテスト実施におけるルール作成とトラブル対応マニュアルの作成
- ・テスト結果の通知方法や自己の課題を分析をしやすい資料の改善

### **今後の計画**

- ・7月22日～26日 校内ICTスキルアップ研修会
- ・9月3日 大阪市5B研究会（音楽）PBL型の学習実践
- ・11月22日 公開授業
- ・2月21日 校内研究発表会

### **気付き・学び** (もしあれば記入)

・単元テストに移行することで「ペーパーテストで問うことができる力とは何か?」や「何のためにテストをするのか?」について考える機会となった。実際ほぼすべての学校がテストの点数によって評価を行い、評価材料としている。もちろん本校も然りである。しかし、そもそもテストの目的は何かと考えた時に、「評価をするためにテストをするのか」、それとも「教科を通じて身につけたい力を育むためにテストをするのか」どちらが優先されるべき目的なのであろうか。学校の目的が「社会に出て必要な力を身につけること」であるのであれば、テストも生徒を育てるための手段でしかない。実際に社会に出て中学校のテストの成績が何点だったかで評価されることはない。それよりもどんな知識を活用して問題解決するかであったり、0から1を生み出し、創造し、イノベーションを起こすことができる人材が評価され、求められる時代となっている。それならば、テストが生徒を育てるための仕組みとしてより充実したものとなるように変容させたいというのが単元テストへの移行の一番の思いであることに気づくことができた。

どのようにして生徒たちに力を身につけさせるか、単元テストへの移行も本校では学び方の手段でしかない。そんな風に思える実践をしていきたい。

---

### **研究課題** (申請書通りに記入)

アダプティブ・ラーニングを地盤とした21世紀スキルとESD教育の推進  
～全生徒を全教員で見守り、自己実現を可能にするICTとAIの効果的な活用～

### **成果目標** (研究活動の進捗にしたがって、できるだけ具体的に記入)

- ・単元テストによって、生徒は学び直しの機会やできないところにより焦点をあてて学習

**活動報告書**  
(財団ホームページ掲載用)

をすることができる。

- ・単元テストによって教師は教科の評価方法を改善する仕組みとなる。
- ・生徒は自らの課題に応じて必要な学習の手立てを考え、選択するようになる。教師も課題を明らかにし、コーチングの視点の向上につながる。
- ・PBL 型学習の推進に伴い、生徒はもちろん、教師も探究的なストーリーを描きながら授業をつくる力が深まる。これにより、学校経営においても同様に、課題解決の視点をもった教員集団が形成される。
- ・生徒が望めば自主的に学ぶ仕組みを整えることで、与えられたことをこなす学習の習慣から、自ら考え、選択し、行動することができる自律した学習者へと変容する。
- ・取り組みによってどんな生徒を育成したいのかを明確にする。また評価の視点をつくり、学校全体で同様の方向性をもって学校運営を推進する。